

Title	脱母性化時代における母親イメージ：ライフステージ別のイメージの比較を通じて
Sub Title	Changing images of "motherhood" in Japan today
Author	新井, 範子(Arai, Noriko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1992
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.35 (1992.) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000035-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

脱母性化時代における母親イメージ

—ライフステージ別のイメージの比較を通じて—

Changing Images of “Motherhood” in Japan Today

新井 範子*

Noriko Arai

In Japan, the birthrate is going down from 1970's. Many women make their choice of having no children. So, the family system and the traditional sex role have changed. And now, the concept of Motherhood have been changing.

The purpose of the present study is to investigate the image of modern mother and three types of concrete mothers who are in different life-stage. 198 male and 206 female were asked about the images of each type. The result were as follow: (1) there was no difference between male and female on modern mother images. It was a traditional and ideological mother image. (2) On other 3 types, these images were very different from modern mother image, and compared to female, male had negative images. (3) Female had a tendency to deny traditional sex roles.

I. はじめに

わが国の出生率は、1970年代の半ばから、低迷を続け、1990年には、合計特殊出生率(注)が1.53と動態統計史上の最低を記録した(厚生省,1990)。また、1992年の「国民生活白書」では、このように出生率が下がり、近い将来やってくる子供や若者が少ない社会のことを「少子社会」と名づけ、子供を生みたくても生めない社会環境の悪さが、出生率低下の原因としている(経済企画庁,1992年)。1990版の厚生白書では、出生率低下の要因は、①晩婚化の進行、②女性の職場進出と結婚の魅力の低下が考えられるとしている。その上で、出生率の低下は経済、社会保障などの面において、大きな影響を与える(厚生省,1990)と危機感を示し、女性の就労と子育てが両立できるような道を探ろうとする姿勢がみられる。つまり、働きながら子育てができる環境を、作っていくとするものである。出生率低下の要因として、このように女性の就労が挙げられることは多い。

しかしながら、Beck-Gernsheim(1989)は、ドイツ統

一前、東ドイツでは、西ドイツに比べ、女性の就業率が高いにもかかわらず、出生率も明かに上回っていることや、働く主婦のほうが、子どもを肯定的に評価していることを前提に、仕事についているか否かという区別や、「女がどうした(中略)」というお決まりの文句を並べるだけでは出生率低下の背後になにかあるかという疑問に答えたことにはならない」と述べている。また、上野(1991)は出生率の低下は「女性が選択を行使して生まなくなったというけれど、(中略)これは、強制された選択なのではないだろうか」と述べ、子供を育てあげるのにかかるコストの急激な上昇が、子供を生めない社会をつくったとしている。

いずれにせよ、「生まない」ことも選択できる現在の社会は、女性が母親としての自己実現以外の道も選択できる社会となっている。社会進出も進み、性別役割も変化している現在、「母親」は、どのように捉えられているのであろうか。本稿は、母親のイメージを調査により明らかにすることで、人口学的見地、社会制度による説明ではなく、出生率低下の背景にある意識を解明する第一歩となることを目的としたものである。

* 社会学研究科社会学専攻博士課程(生活者行動)

II. 「母性」概念の再検討

II-1. 母性の誕生

「母性」という言葉を辞書でひくと、「女性が母親としてもっている性質」というように書いてあることが多い。沢山 (1979) によると、「母性」という言葉が日本で初めて使われたのは、大正時代のことであり、スウェーデンのエレン＝ケイの *moderskap* (英語の *motherhood*, *maternity*) の訳語として登場したようである。それ以後、「母性」はしっかりと定着し、女性に本来備わっている本能、母性本能として扱われてきた。そして、「母性愛」は、自己犠牲的、無償の愛というイメージが絶対的であり、そのイメージが理念型の母親像として浸透し、そのイメージにそった行動こそが、理想の母親とされてきた。母親のあるべき姿は家族制度と深く関連しており、第二次世界大戦前の日本における「家」制度のもとでは、「母性」はこどもを生み、育てる手段、道具として使われていた。戦後、核家族化が進む中で、都市化とあいまって、「家」や村によって支えられ、補われていた子育ては、母親が一身に引き受けることになったのである (堤, 1992)。そして、性役割分業が進み、「夫は外、妻は家」という近代的な家族の分業形態が望ましいものとして、社会に受け入れられていったのである。

II-2. 近代的母性神話の崩壊

しかし、あたかも女性の本能のごとくとらえられてきた「母性」に異議を申し立てたのは、Aries (1960) である。彼は、現代の社会において、家族や家族愛について常識のようにもっている感覚とは異なるものが、歴史的に存在したことを裏付け、母性愛は近代の産物に過ぎないとしている。また、Badinter (1980) は、母性愛は女性の本能ではなく、社会的に要請されたその時代によって、プラスになったり、マイナスになったりすることを示し、付加される愛 (*l'amour en plus*) であると指摘している。

Genevie と Margolies (1987) は、アメリカ全土の母親たちへの調査に基づき、母親であることを否定的にしか見ることのできない女性たちが、5人に1人おり、大部分の女性たちが、母親であることに對し、非常に大きな矛盾を抱えていることを明らかにし、一般的な「母性」イメージが、現実とはどんなに異なっているかを明らかにした。日本においても大日向 (1988) は母親を対象とした調査より、母親役割を受容し、そのことに生きがいや充実を感じ、そのことが自分らしいと感じる認識

は低いことを指摘している。また、母親意識の世代別調査を行い、昭和初期に育児を担当した母親は、現代の母親より、母親であることを肯定的に受容しているが、現代の母親は母親であることと、自分自身の生活を求める欲求との間で、葛藤が強いことを明らかにしている。

女性の高学歴化が進み、社会に参加する機会も開かれている現在、近代に誕生した献身的で犠牲的でふくよかな「母性」は、本能ではなく、社会的に培われるものであることが明らかにされていったのである。

II-3. 「母親」をめぐる変化

Bernald (1983) は、アメリカの伝統的な、父親が養い、妻は主婦という構造は、1980年代までの寿命であったと指摘しているように、現在の社会では、女性が、一人ひとりの人間として、「男は外、女は家」的な型にとらわれずに、それぞれの個人として、生き方を選択できる時代になってきた。女性、ことに既婚女性の雇用率の高まりにより、性役割分業も流動化し、家族の役割構造にも変化が生じてきた。このような傾向が続くと、男女の性役割分業がなくなる男女共業型社会 (庄司, 1986) が出現すると考えられる。このような社会では、物材の生産と人間の出産、養育や介護も同等に重要な労働となり、男女の扶養、被扶養関係や支配、被支配の関係も消滅する (岡村, 1990) であろうと考えられる。

就労女性が増えたことで、「性役割の革命」 (Davis, 1984) が起こったと言われている。しかしながら、現在の社会はその革命が進行中の社会であると言ってよいだろう。家庭と仕事の両立をめざしながらも、家事の負担が女性の重荷になるケース、仕事と家事のダブルバインドに悩まされている女性も多い。しかしながら、一方では「生まない女性」も社会的に認められるようになってきた。こどもを生まない女性のイメージを調べ、「利己的でない」、「不自然ではない」、と多くの人が感じている (Hare-Mustin & Brodeick, 1979) と報告している研究もある。

また、こどもを生み、母親になっても、社会参加と育児の接点を見つけ、家事や育児といった「シャドウワーク」 (Illich, 1981) だけでなく、主体的に生きようという女性も多く出現している。「母親」としての自己実現だけが女性の選択肢ではない。それにともなって、家族の中の母親の位置づけも変化してくる。就労の他にも、子供数の減少にともなる育児期間の短縮、また技術革新での家事時間の短縮、そして、夫との家事分担の平等化への流れ (岡村, 1986) などの要因により、家族内での母親の位置づけも変化しつつある。

また、母親になってからのライフコースも変化している。子ども数の現象による出産期間の大幅な短縮と平均寿命の伸びなどが、その大きな要因と考えられる。明治38年生まれの女性のライフコースでは、出産期間が12.5年にもおよんでいるのに、昭和34年生まれの女性では2.4年と大幅に減少している。また、寿命の大幅な伸びにより、子どもの独立後も30年もの間、脱親期がある(善積, 1991)。このように、戦前では考えられなかった自由時間を母親は持つようになったのである。このことより、一言で母親と言っても、どのライフステージに位置しているかによって、母親としての生活や役割が大きく異なり、それにつれて母親のイメージに大きな差が見られると思われる。つまり、現在の時代の理念型としての母親イメージは、なくなりつつあるのではないかと考えることができるであろう。

III. 調 査

III-1. 調査目的/調査内容

「母親」をめぐる状況が変化しつつある現在、これから親になることを選択する世代が、「母親」をどんなイメージでとらえられているのかを調べることが、本調査の目的である。また、「母親」という言葉により、理念的な母親イメージだけが浮かび上がってくる可能性も考慮し、より実際に抱えているイメージを調査するため、ライフステージ別の母親イメージもあわせてきくことにした。これは、母親のイメージもライフステージごとに変化することも予想されたためでもある。

上記の理由により、①「母親」イメージの他、ライフステージが別の3つの母親イメージ、②「赤ちゃんの母親」、③「小学生の子供を持つ母親」、④「社会人の子供を持つ母親」のイメージの4つの母親イメージが調査された。②～④の3つのライフステージは、子どもが就学前、就学中、就学後のそれぞれを具体的に表したものである。また、①～④の母親のイメージが、自分が「こうになりたい」と思っている女性と、どのように異なるのかをみるために、⑤「自分のになりたい女性のイメージ、男性の場合には、「女性はこうあるべきだと思われるイメージ」(以下、この2つを『理想女性』とする)も調査した。

III-2. SD 尺度構成のための予備調査

本調査のため、SD法の方式に従った尺度項目を選定するための予備調査を行った。その内容は、上の①～⑤の5つのタイプの女性の特性を記述する形容詞の収集である。対象者は社会人男性40人、女性41人の計81人

である。平均年齢は25.3歳(レンジ21～30歳)。①～⑤のそれぞれについて、思い浮かぶ形容詞を収集した。次に得られた回答(反応語延べ数, 812語)を分類し、それらから、以下のような基準で形容詞が選択された。まず、①、身体的な特徴を表現している言葉は除く、②、出現頻度の高い言葉は採用する、③、正の意味を持つ言葉だけでなく、負の意味を持つ言葉も採用する、これらの手続きで23対、46の形容詞が選択された。

III-3. 本調査

本調査は、予備調査で採択された形容詞対をランダムに配置したSDスケールにより、上記の①～⑤の女性のイメージを7段階尺度で評定させた。

III-3-1. 調査対象者

これから親になるかどうかを選択する、または選択中の世代として、20代の男女、そして、子どものいない人を対象とし、また母親のライフステージごとのイメージの違いをみるために、対象者をこの世代だけに限ることとした。男女とも会社員と大学3、4年生を対象にし、男女合計は404名。男性は平均年齢25.7歳(レンジ20歳～29歳)計198名。内訳は会社員、101人、大学生、97名。女性は、会社員110名、大学生、96名の計206名。平均年齢25.3歳(レンジ20歳～29歳)。会社員は東京にある民間企業に勤める社員500名を対象に郵送法により行われた。回収率42%はである。大学生は都内私立大学S大学とK大学において、ゼミの時間を利用し、集団で実施された。

III-3-2. 調査実施時期

平成4年9月～10月。

III-3-3. 質問紙

質問紙は①「母親」、②「赤ちゃんの母親」、③「小学生の子供を持つ母親」、④「社会人の子供を持つ母親」、⑤「理想女性」の5つのイメージを、予備調査により得られた23対の形容詞対とランダムに配置したSDスケールにより、7段階で評価させた。その他、フェイスシートにおいて、年齢、性別、最終学歴、職業、婚姻状況の人口統計学的変数、そして、女性については、将来的に子どもを生みたいと思っどうか、子どもが生まれた後の仕事をどのように考えているか、という子どもを持つことに対する意識をきいた。

なお、本調査と予備調査はすべて異なった対象者からとられている。

IV. 結 果

①～⑤のそれぞれの形容詞尺度への反応に対し、個別

表 1: 『母親』イメージ尺度の因子分析の結果

		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	h ²
開放性	視野が広い—視野が狭い	.73	.21	.03	.75
	余裕のある—余裕のない	.70	.15	.13	.53
	知性のある—知性のない	.69	.18	.18	.55
	洗練された—野暮ったい	.67	.04	.27	.52
	自由な—不自由な	.59	-.03	.24	.41
	色気のある—色気のない	.57	-.01	.05	.32
	鋭い—鈍い	.56	.01	.32	.42
	行動力のある—行動力のない	.52	.16	.46	.51
	かわいい—かわいくない	.51	.24	-.06	.32
社交的な—非社交的な	.47	.07	.44	.42	
共同性	暖かい—冷たい	.08	.79	.23	.68
	家庭的な—非家庭的な	.01	.74	.02	.54
	献身的な—利己的な	-.02	.71	.12	.51
	おもいやりのある—わがままな	.31	.66	-.07	.53
	忍耐強い—忍耐強くない	-.02	.66	.02	.43
	やさしい—きびしい	.07	.59	-.01	.13
	明るい—暗い	.24	.56	.18	.41
心が広い—心が狭い	.42	.44	.06	.37	
自己顕示性	自信のある—自信のない	.28	.15	.70	.69
	気が強い—気が弱い	-.04	-.07	.69	.48
	積極的な—消極的な	.18	.13	.68	.51
	自己主張できる—自己主張できない	.50	-.01	.55	.56
	充実した—空虚な	.26	.33	.39	.34
	固有値	4.48	3.77	2.71	
	寄与率 (%)	55.7	24.6	13.8	

(バリマックス回転後)

に因子分析を施し、基本次元の抽出を試みた。用いた因子分析の手法は、初期値に SMC を用い、共通性の反復推定をおこなって主因子解を求め、バリマックス回転を施すものである。また、性差があるかどうかをみるために、男女別に各尺度について平均値と標準偏差を求め、

t 検定を行い、プロフィールを比較した。

IV-1. 『母親』イメージ

『母親』のイメージでは、第 1 軸では「視野が広い—視野が狭い」「余裕がある—余裕がない」「知性のある—知性のない」などの尺度の負荷量が高く、個人の意思や

図 1: 『母親』各尺度の平均値, t 検定の結果とプロフィール



行動の広がりを表すものと考えられ、〈解放性〉因子とした。第2軸は「暖かい—冷たい」「家庭的な—家庭的でない」「献身的な—利己的な」などに負荷量が高く、他者への配慮や包容力を表すものとして〈共同性〉因子とした。第3軸は「自信のある—自信のない」「気が強い—気が弱い」など、自分の意思の主張の軸として、〈自己顕示性〉因子とし、以上の3つの因子構造が認められた。(表1) 第1因子と第2因子が重要な次元を占めていることから、(寄与率は4.48と3.77)、行動や意識の広がり、他人への親和性が『母親』イメージの基

本的特性と言えよう。また、各尺度の平均値によるプロフィール(図1)を見ると、暖かく、家庭的で献身的であるが、自由ではなく、自信のない母親像が読み取れる。〈解放性〉因子の寄与率が高いことから、『母親』に関しては、意識や行動の範囲が狭く、自由ではないが、暖かく、家庭的で献身的であるという母親像が浮かんでくる。いわゆる、性役割分担がしっかりしている近代家族における母親のイメージとかなり重なっていると言えるであろう。また、t検定の結果を見ると、男女群での有意差(p<0.1)が認められたのが一項目しかなかった。

表 2:『赤ちゃんの母親』イメージ尺度の因子分析の結果

		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	h ²
共 同 性	やさしい—きびしい	.82	.13	.06	.70
	献身的な—利己的な	.73	.14	-.07	.57
	おもいやりのある—わがままな	.72	.10	-.11	.54
	暖かい—冷たい	.71	.08	.31	.61
	明るい—暗い	.66	.39	.16	.61
	心が広い—心が狭い	.63	.24	.13	.48
	家庭的な—家庭的でない	.62	-.08	.19	.42
	忍耐強い—忍耐強くない	.59	-.04	.31	.59
	充実した—空虚な	.39	.22	.29	.29
解 放 性	視野が広い—視野が狭い	.19	.73	.03	.57
	洗練された—野暮ったい	.11	.68	.02	.47
	余裕のある—余裕のない	.11	.63	.02	.54
	色気のある—色気のない	.10	.57	.11	.34
	自由な—自由な	.00	.51	.10	.39
	知性のある—知性のない	.35	.55	.09	.44
	自己主張できる—自己主張できない	.03	.50	.25	.31
	行動力のある—行動力のない	.48	.49	.45	.45
	鋭い—鈍い	.02	.44	.27	.27
	かわいい—かわいくない	.39	.40	-.05	.32
自 己 顕 示 性	積極的な—消極的な	.13	.19	.73	.59
	気が強い—気が弱い	.03	-.06	.72	.52
	自信のある—自信のない	.28	.21	.59	.47
	社交的な—非社交的な	.07	.37	.46	.36
	固 有 値	4.45	3.81	3.37	
	寄 与 率 (%)	55.0	21.9	17.9	

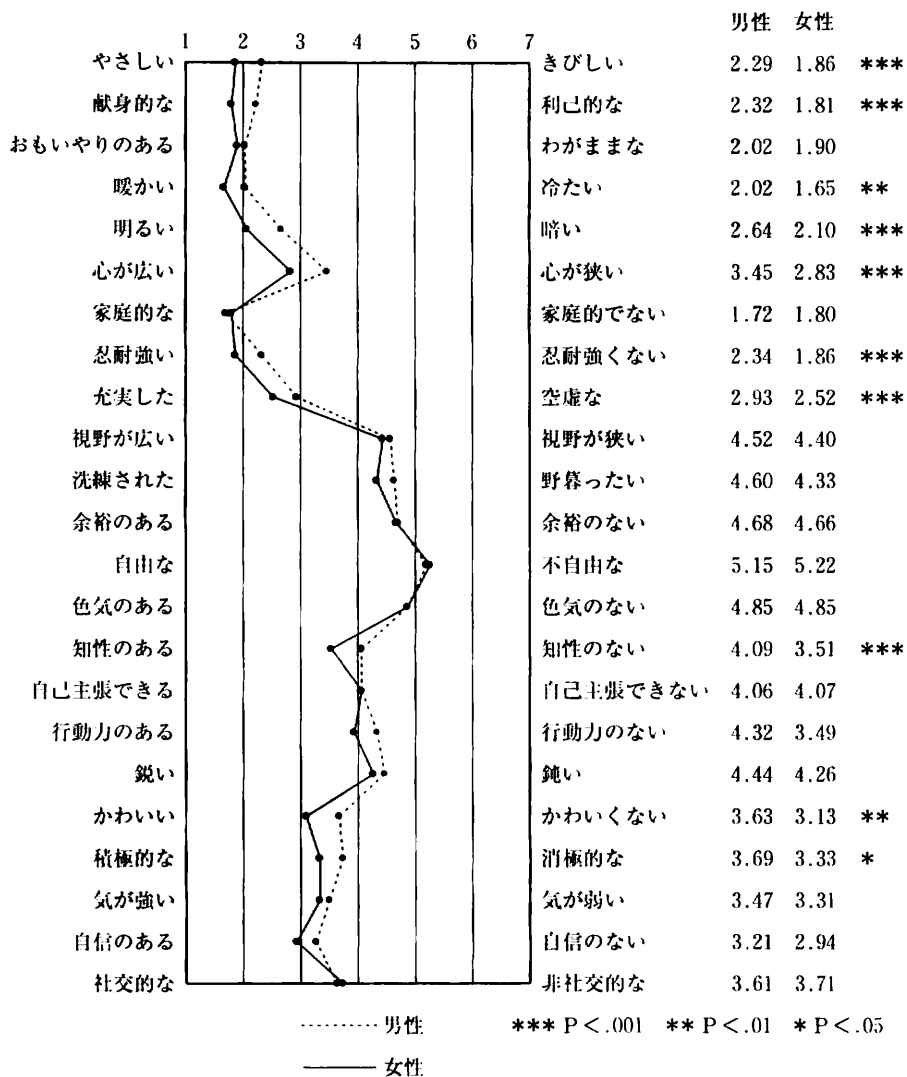
(バリマックス回転後)

このことから、山村 (1971) が「日本の母は価値的なシンボルとして機能している」と述べている通り、プロトタイプの母親イメージがすでに文化的に確立しており、現代の社会にあっても、その理念型として残っていると言える。

IV-2. 『赤ちゃんの母親』イメージ

第 1 軸は〈共同性〉因子、第 2 軸では「視野が広い—視野が狭い」などが高い負荷量を持つことから、意識や行動の〈解放性〉因子、第 3 軸は〈自己顕示性〉因子と解釈された (表 2)。因子構造も、『母親』の場合と順序

図 2: 『赤ちゃんの母親』各尺度の平均値, t 検定の結果とプロフィール



が入れ替わっただけで、構造としては同じであり、プロフィール (図 2) も他のタイプと比べると、『母親』イメージに似ていた。つまり、『赤ちゃんの母親』に対しては、やさしく、献身的な、いわゆる「母性的」であるが、自由や余裕がないというイメージを持っていることがわかった。これは、育児に手がかかり、自由な時間を持ってないという幼児の母親の生活を写しだしたものと見えるが、そのように自分の時間を犠牲にし、長い時間、育児に専念する姿を「伝統的な母親」イメージに近いものとして、とらえていることがわかった。

IV-3. 『小学生の母親』イメージ

第1因子として、〈共同性〉因子、第2因子は「色気のある」「視野が広い」などとその反対語から構成される尺度の負荷量が高く、女性の内面、外面のスマートさを軸にしたものとみなし、〈スマート〉因子とした。第3因子は〈自己顕示〉因子、第4因子は「充実した—空虚な」「行動力のある—行動力のない」「社交的—非社交的」などの尺度で負荷量が高く、自分で行動し、それを受け入れることを示す次元として、〈自己享受〉因子と命名した (表 3)。第1因子である「共同性」の寄

表 3: 『小学生の母親』イメージ尺度の因子分析の結果

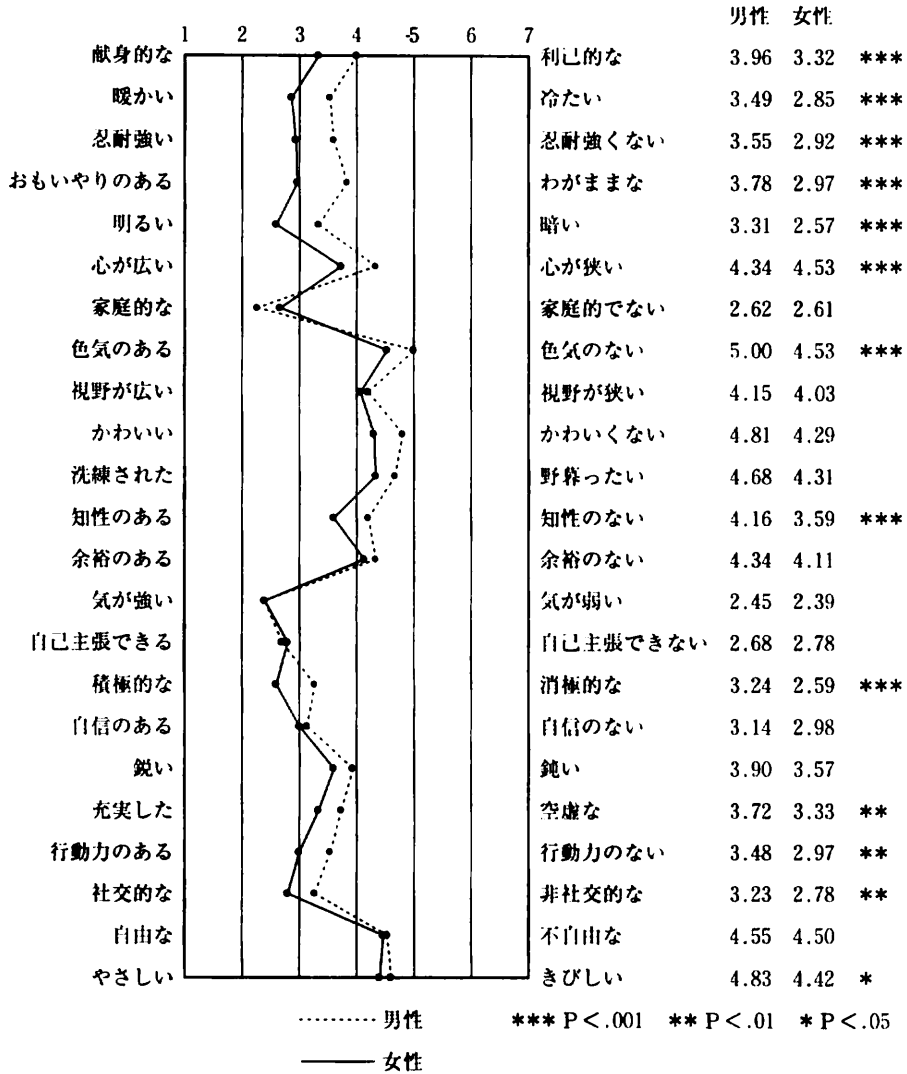
		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	h ²
共同性	献身的な—利己的な	.67	.36	.14	.17	.63
	暖かい—冷たい	.67	.20	.21	.23	.58
	忍耐強い—忍耐強くない	.65	.15	.17	.01	.48
	おもいやりのある—わがままな	.64	.39	.31	.16	.69
	明るい—暗い	.60	.21	.48	.14	.65
	心が広い—心が狭い	.58	.41	.11	.16	.54
	家庭的な—家庭的でない	.38	.12	.18	.30	.28
スマート	色気のある—色気のない	.15	.67	.13	.14	.51
	視野が広い—視野が狭い	.23	.66	.18	.10	.53
	かわいい—かわいくない	.36	.60	.03	.18	.52
	洗練された—野暮ったい	.18	.58	-.02	.45	.57
	知性のある—知性のない	.36	.54	.20	.20	.60
	余裕のある—余裕のない	.24	.53	.10	.10	.46
自己顕示性	気が強い—気が弱い	.13	-.04	.70	.10	.52
	自己主張できる—自己主張できない	.06	.15	.70	.09	.52
	積極的な—消極的な	.30	.12	.67	.24	.61
	自信のある—自信のない	.29	.26	.53	.13	.46
	鋭い—鈍い	.35	.36	.41	.15	.44
自己享受性	充実した—空虚な	.37	.14	-.11	.63	.56
	行動力のある—行動力のない	.02	.27	.40	.61	.69
	社交的な—非社交的な	.20	.18	.43	.61	.60
	自由な—不自由な	.09	.43	.02	.56	.52
	やさしい—きびしい	.40	.26	.23	.51	.54
	固 有 値	3.67	3.34	3.03	2.48	
	寄 与 率 (%)	68.2	15.4	8.6	7.6	

(バリマックス回転後)

与率が他のタイプの比べてとても高い。プロフィール(図3)を見てみると、「献身的な」「家庭的な」「やさしい」などの〈共同性〉因子を構成している尺度において、母親イメージと大きな差が見られた。そして、〈自己顕示〉因子において負荷量が高い「自己主張できる」「気

が強い」とその反対語からなる尺度の平均値も、母親イメージとは大きく差が見られる。つまり、他者に対して寛容ではなく、自分の存在や意思を顕示し、きびしいというイメージであることがわかる。またこの『小学生の母親』は、5つのイメージの中でいちばん、ネガティブ

図 3: 『小学生の母親』各尺度の平均値, t 検定の結果とプロフィール



に受け入れられていることがわかる。しかし、蘭(1989)の調査によると、母親像は「献身的で苦勞が多く、夫や子供を第1にして生きている像」と「利己的で感情的で自分勝手な」母親像の両方があるということがわかり、この『小学生の母親』イメージは後者のイメージと近いと言え、母親のイメージとかけ離れているということは、一概には言えないであろう。

IV-4. 『社会人の母親』イメージ

『社会人の母親』のイメージ調査では、第1軸が「行動力のある—行動力のない」「社交的な—非社交的な」

など外へむいている行動や意識を示す軸として〈外向性〉因子ととらえられた。また第2因子は「やさしい—きびしい」「おもいやりのある—わがまま」「な心が広い—心が狭い」など広い次元での他者との関係を表すものとして、〈共同性〉因子とした。第3因子は〈スマート〉因子と解釈し、第4因子は、「忍耐強い」「家庭的な」「献身的な」とその反対語からなる尺度の負荷量が高く、自分よりも他者優位に行動しようとする意識の軸として〈他者志向的〉因子と解釈し、以上、4つの因子構造が見られた(表4)。『社会人の母親』イメージの特徴とし

表 4: 『社会人の母親』イメージ尺度の因子分析の結果

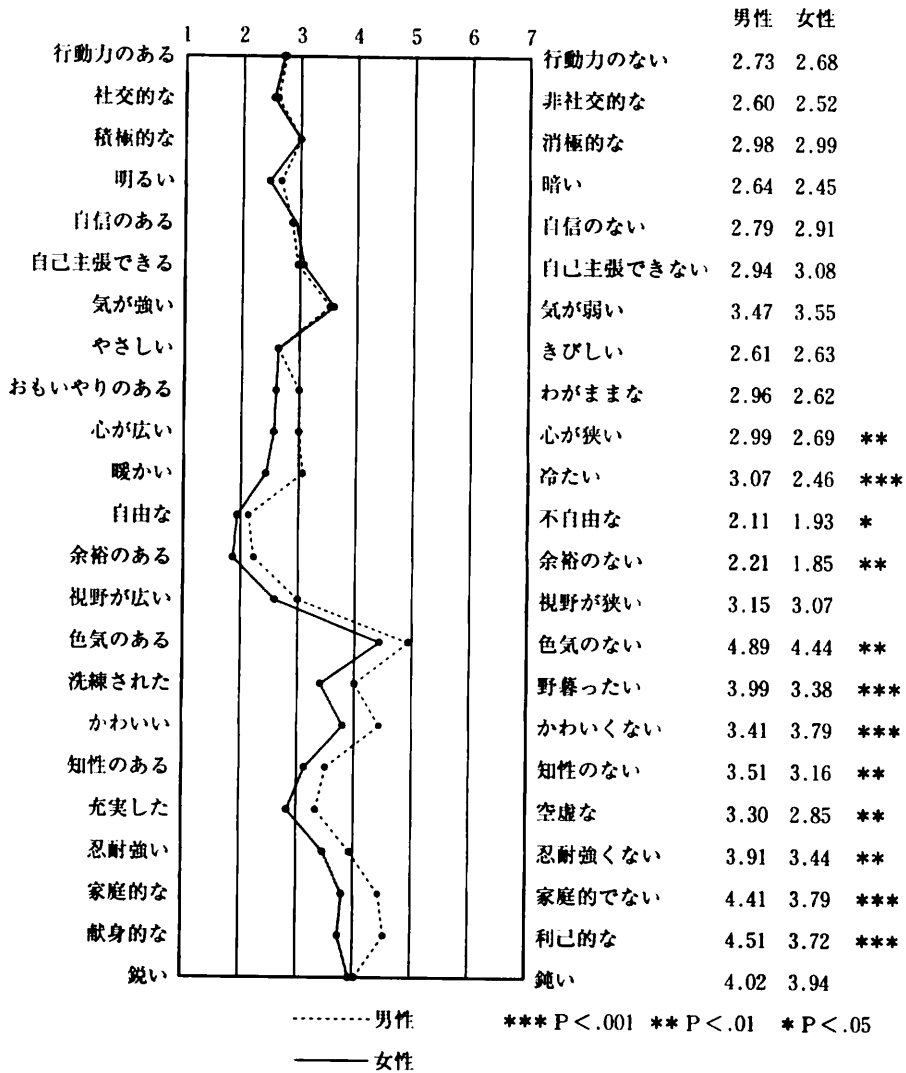
		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	h ²
外向性	行動力のある—行動力のない	.82	.07	.16	-.08	.72
	社交的な—非社交的な	.77	.12	.26	.05	.69
	積極的な—消極的な	.74	.16	.24	.00	.71
	明るい—暗い	.69	.31	.20	.02	.61
	自信のある—自信のない	.65	.19	.01	.08	.46
	自己主張できる—自己主張できない	.65	.15	.07	-.01	.44
	気が強い—気が弱い	.50	-.04	.04	.09	.26
共同性	やさしい—きびしい	.03	.73	.25	.17	.62
	おもいやりのある—わがままな	.08	.71	.32	.56	.69
	心が広い—心が狭い	.13	.61	.24	.41	.61
	暖かい—冷たい	.22	.58	.35	.31	.62
	自由な—不自由な	.34	.52	.11	-.08	.40
	余裕のある—余裕のない	.36	.48	-.05	.19	.40
	視野が広い—視野が狭い	.24	.46	.38	.34	.54
スマート	色気のある—色気のない	.05	.16	.68	-.03	.49
	洗練された—野暮っぽい	.29	.12	.67	.20	.60
	かわいい—かわいくない	.11	.32	.62	.06	.50
	知性のある—知性のない	.35	.17	.54	.23	.49
	充実した—空虚な	.35	.32	.48	.25	.52
他者志向	忍耐強い—忍耐強くない	.05	.14	.08	.78	.36
	家庭的な—家庭的でない	-.06	.19	.02	.71	.54
	献身的な—利己的な	-.05	.16	.15	.68	.53
	鋭い—鈍い	.37	.07	.42	.50	.67
	固有値	4.25	3.02	2.75	2.65	
	寄与率 (%)	56.4	19.2	8.7	8.6	

(バリマックス回転後)

ては、第 1 因子〈外向性〉が主要な次元を占めているという点である。つまり『社会人の母親』イメージの基本的特性が〈外向性〉であり、この因子を構成している尺度のプロフィール(図 4)を見てみると、『母親』や『赤ちゃんの母親』とちがって、自由で行動が外向きである

ととらえていることがわかる。そして〈共同性〉因子で負荷量が高い尺度が、母親イメージとは大きく違っている。つまり、あまり家庭的や献身的でないというイメージが読み取れる。これらは、子育てを終えた母親が、子育てや家庭のことに時間、労力を追われることなく、自

図 4: 『社会人の母親』各尺度の平均値, t 検定の結果とプロフィール



由な時間が増え、主体的に生活しているといったイメージとして受け取れる。

IV-5. 『理想女性』イメージ

女性たちがどんな女性になりたいかという（男性は「女性はどうあるべきか」という『理想女性』イメージは、それぞれの母親イメージとは全く違う結果が出た。まず、因子分析の結果、2つの因子が認められた。第1軸は「自信のある—自信のない」「行動力のある—行動力のない」などの尺度の負荷量が高く、主体的に生きることを示す〈主体性〉因子と解釈した。また、第2軸は

「暖かい—冷たい」「やさしい—きびしい」などで負荷量が高く、〈明朗性〉因子とみなした（表5）。しかし、t検定の結果、他のタイプに比べ、男女差が非常に大きいと判断されたので、男女別の因子構造を見てみると、おのおの3つの因子構造が認められた。

男性の場合、（表6）第1因子が〈共同性〉、第2因子が〈自己顕示性〉、第3因子として〈気の強さ〉が認められた。また、女性の場合（表7）は、「知性のある—知性のない」「社交的な—社会的でない」などの因子の負荷量が高いことから、第1因子を〈ソフィステイティ

表 5: 『理想女性』イメージ尺度の因子分析の結果 (男女一括)

		第 1 因子	第 2 因子	h ²
主 体 性	自信のある—自信のない	.73	.15	.57
	行動力のある—行動力のない	.73	-.09	.55
	視野が広い—視野が狭い	.69	.14	.49
	積極的な—消極的な	.68	.15	.49
	自己主張できる—自己主張できない	.68	-.15	.48
	知性のある—知性のない	.60	.10	.37
	洗練された—野暮ったい	.60	.15	.38
	自由な—不自由な	.60	.00	.36
	余裕のある—余裕のない	.56	.32	.41
	充実した—空虚な	.55	.16	.33
	社交的な—非社交的な	.54	.27	.36
	鋭い—鈍い	.51	-.02	.31
	気が強い—気が弱い	.49	.31	.34
	明 朗 性	暖かい—冷たい	.15	.74
やさしい—きびしい		.06	.69	.48
明るい—暗い		.16	.63	.43
家庭的な—家庭的でない		-.03	.62	.48
かわいい—かわいくない		.02	.62	.38
献身的な—利己的な		-.25	.61	.43
視野が広い—視野が狭い		.04	.59	.51
忍耐強い—忍耐強くない		-.01	.52	.49
心が広い—心が狭い		.34	.50	.37
おもいやりのある—わがままな		.07	.34	.42
	固 有 値	5.48	4.11	
	寄 与 率 (%)	55.7	36.1	

(バリマックス回転後)

ド> 因子と理解した。これは、他との関係ではなく、自分自身を軸とした力や意識の主張、自己の拡大の軸と言える。第2因子として〈共同性〉、第3因子が〈主体性〉となっている。このように男性の場合は、『理想女性』のイメージとして〈共同性〉因子の寄与率が高く、女性

の場合は、〈ソフィスケイティッド〉因子が高い。つまり、『理想女性』のイメージは、男性の場合、他との関係における軸が重要であり、女性の場合、自分の力を示す軸が重要であるということが言える。また、男女の差が大きい尺度 (図5) は「自信のある—ない」「行動力

表 6: 『理想女性』イメージ尺度の因子分析の結果 (男性)

		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	h ²
共 同 性	明るい—暗い	.78	.17	.00	.64
	暖かい—冷たい	.77	.11	-.11	.62
	心が広い—心が狭い	.75	.16	.10	.60
	やさしい—きびしい	.75	-.05	-.10	.57
	おもいやりのある—わがままな	.73	.11	.00	.55
	献身的な—利己的な	.69	-.09	-.10	.50
	かわいい—かわいくない	.65	.01	.00	.43
	忍耐強い—忍耐強くない	.60	.11	.19	.40
	余裕のある—余裕のない	.59	.20	.17	.41
	家庭的な—家庭的でない	.56	-.05	-.09	.36
	社交的な—非社交的な	.41	-.09	-.01	.28
	洗練された—野暮ったい	.38	.22	.12	.21
自己顕示性	自己主張できる—自己主張できない	-.01	.65	.03	.43
	行動力のある—行動力のない	-.11	.63	-.10	.42
	自信のある—自信のない	.26	.62	.32	.55
	積極的な—消極的な	.29	.58	.39	.57
	自由な—不自由な	.10	.51	.15	.57
	視野が広い—視野が狭い	.38	.40	.22	.35
気 の 強 さ	充実した—空虚な	.23	.36	.01	.16
	気が強い—気が弱い	-.02	.16	.80	.67
	鋭い—鈍い	-.11	-.05	.73	.54
	知性のある—知性のない	.05	.16	.37	.68
	色気のある—色気のない	.15	.21	.36	.50
固 有 値		5.75	2.67	2.12	
寄 与 率 (%)		48.2	21.6	56.0	

(バリマックス回転後)

のある—行動力のない」などあり、このことから、女性は自ら行動し、積極的に生きたいと思っているのに対し、男性たちは、あまり行動的過ぎないのがよいと思っているのがうかがえる。これは、伝統的な性別役割の価値観に基づいた結果と考えることができる。つまり行動力

や積極性は、「男は外、女は家」の価値観においては男性的な意味あいの言葉であるからである。東 (1990) の調査における、女性より男性のほうが、性別役割分担志向が高いという結果に即したものと言えるであろう。

表 7: 『理想女性』イメージ尺度の因子分析の結果 (女性)

		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	h^2
ソ フ ィ ス ケ ィ テ ッ ド	知性のある—知性のない	.72	.01	.01	.53
	社交的な—非社交的な	.67	.00	.14	.47
	明るい—暗い	.64	.28	.01	.50
	自信のある—自信のない	.62	.01	.30	.48
	行動力のある—行動力のない	.58	-.06	.41	.52
	充実した—空虚な	.54	.02	.10	.33
	色気のある—色気のない	.51	.23	.01	.32
	洗練された—野暮ったい	.47	-.02	.38	.36
	余裕のある—余裕のない	.42	.18	.30	.29
	自己主張できる—自己主張できない	.41	-.08	.21	.36
共 同 性	暖かい—冷たい	.39	.68	-.09	.63
	家庭的な—家庭的でない	.04	.66	.12	.44
	やしい—きびしい	.25	.60	.10	.43
	献身的な—利己的な	-.08	.58	.02	.34
	おもいやりのある—わがままな	.28	.54	-.05	.38
	気が強い—気が弱い	.15	-.52	.16	.32
	かわいい—かわいくない	.28	.49	.21	.37
	忍耐強い—忍耐強くない	.32	.40	.19	.35
主 体 性	積極的な—消極的な	.25	.12	.69	.56
	自由な—不自由な	.14	-.01	.63	.42
	心が広い—心が狭い	.06	.37	.56	.45
	鋭い鈍い—視野が広い	.04	-.01	.53	.30
	視野が狭い—視野が狭い	.39	-.01	.53	.44
	固 有 値	3.85	3.03	2.61	
	寄 与 率 (%)	50.5	25.1	15.4	

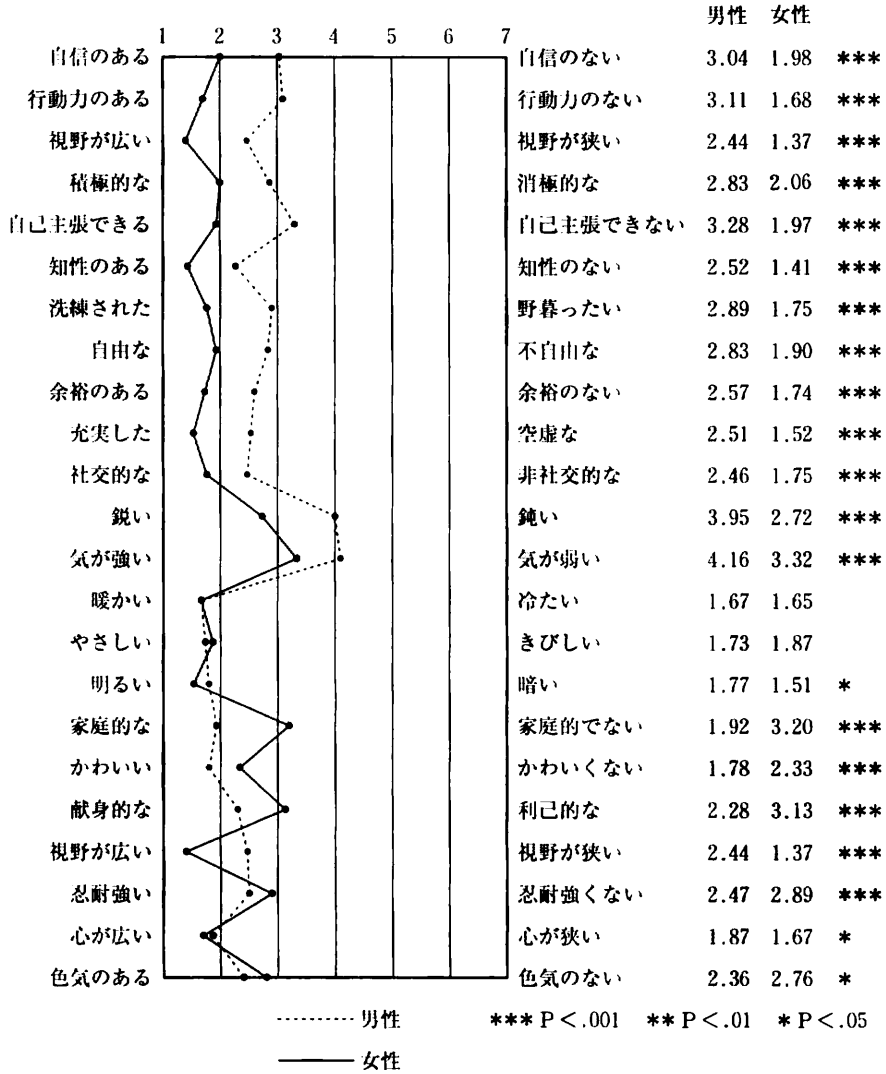
(バリマックス回転後)

V. 考 察

調査の結果より、一言で表される「母親」には、プロトタイプ的なイメージがあるが、母親のイメージもライフステージごとにかなり異なることがわかった。つまり、母親という言葉から連想する母親イメージは理想的

なものであって、具体的な母親イメージをもとにつくられたものではない。そして、その理想的な母親イメージは近代の伝統的な母親イメージとかなり近いものであることがわかった。そして、小さな子どもを持っている母親は、伝統的な母親イメージと近く、子育てを終えた母親のイメージは、伝統的な母親イメージと大きく違うも

図 5: 『理想女性』各尺度の平均値, t 検定の結果とプロフィール



のであった。つまり、子どもの年齢によって母親のイメージが変わることから、母親イメージは育児の内容と大きく結びついていることがわかる。つまり、子どもの世話をかかいいしくする、という態度や行動が母親らしいとイメージされると言えるであろう。

また、『小学生の母親』のイメージがかなりネガティブであったことの背景には、『赤ちゃんの母親』のように、育児がたいへんではないという点で、伝統的な母親的イメージで捉えるのが難しくなり、また、『社会人の母親』のように自由でもなく、外向性も感じられないの

で、このような結果になったのかもしれない。または、マスコミなどによって描かれるこの世代の母親像などが影響している可能性も考えられる。いずれにせよ、このような差を生んだ原因は今後、説明していかななくてはならない。

また、男女差であるが、『母親』イメージではほとんど男女によるイメージの差がみられなかったが、その他では差が明らかになった。『赤ちゃんの母親』『小学生の母親』『社会人の母親』の3タイプすべてにおいて男女差が有意であった項目は、「暖かい」「忍耐強い」「献身

的な「心が広い」とその反対語からなる項目である。男性のほうが女性よりも、それぞれの母親を、冷たい、忍耐強くなく、献身的でなく、心が狭いとイメージしていた。これらの尺度は、他との関係を示す次元の〈共同性〉因子に高い負荷量をもっており、これらは、また伝統的な母親イメージをつくっている尺度と考えることもできる。つまり、現在の社会における母親に対しては、女性よりも男性のほうが、伝統的な母親的ではないと評価を下していることがわかる。

また、女性の理想イメージといずれの母親イメージの間には大きな差が見られる。母親イメージでは、他との関係を表す「共同性」の軸が重要な次元を示していたのに対し、自分の理想とするイメージでは、個人の中での拡大や維持を示す因子の割合が高いことがわかった。現代の女性たちは、他との関係の中よりも、個人の持てる力の作動性の中に、生き方を見だしていきたいと思っていることがうかがえる。しかし、それぞれの母親イメージの中では、個人の力の作動性を示す尺度が、ネガティブに評価されている。このことより、子どもを持つこと（母親になること）は、個人の力の拡大や発揮の機会を失うことであると、対象となった 20 代の人々が受けとめていると言えるであろう。

VI. おわりに

20 代の女性たちが、理想として抱いている女性像と、母親に対して抱いているイメージでは大きな差が見られた。理想としては自分の力を活かしていきたいと思っているが、子どもを持つと、自分の力を活かすどころか、自由に生活できないと感じている。つまり、子育ては、自己実現に、マイナスになると感じていると考えることができる。このことは、子育てから解放された母親に対するイメージが、理想の自分のイメージと一番近いことから、伺えるであろう。

この背景には、子育てに関しては、完全な性別役割分業であるという社会の構図があることが指摘できるであろう。家族が核家族化し、子育てという再生産労働が、母親という女性によって担われた（上野, 1990）。その後、女性の就労の拡大などにもなって、家族が変化しても、子育ては母親の役割という意識がまだ、深く根付いているのである。つまり、母親が仕事を持つのなら、仕事も子育ても、そして家庭も、引き受けなくてはならないのだ。男女の雇用機会の均等化が進み、職業上での平等が進行しているが、その進行のスピードに比べ、家庭内の平等の進行は遅れていると言えるであろう。また、

社会環境の面では、育児を支援する施設やシステムの不備などの問題もある。

以上のようなことが影響をし、母親のイメージと、理想とする自分のイメージの乖離を生み出しているのであろう。そして、それが出生率低下の一要因となっていることは否めない。

(注) ある年間の女子の年齢各歳ごとの出生率を合計したものの。仮にその産み方で産んだとして、一人の女子が一生の間に生むこどもの数でもある。

引用文献

- 蘭香代子, 1989, 『母親モラトリアムの時代』北大路書房, p. 7.
- Aries, Philippe, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime.* (杉山光信, 杉山恵美子(訳), 1980, 『〈子供〉の誕生〜アンシャン・レージューム期の子供と家族生活』みすず書房)
- 東 清和, 1990, 青年期における性別志向性の性差, 『社会心理学研究』第 6 巻第 1 号, pp. 23-32.
- Badinter, Elisabeth, 1980, *L'Amour en plus-Histoire de l'amour maternel, XVII-XX, siecle.* (鈴木晶(訳), 1991, 『母性という神話』筑摩書房)
- Beck-Gernsheim, E., 1984, *Zur neuen mutterlichkeit?* (香川檀(訳)『出生率はなぜ下がったか』)
- Bernald, J., 1983, "The Good-Provider Role: Its Rise and Fall," in Skolnick, A. S. & Skolnick, J. H. (eds.), *Family in Transition*, 4th Edition, Little, Brown & Co., pp. 155-175.
- Davis, K., 1984, "Wives and Work: The Sex Revolution and Its Consequences," in *Population and Development Review*, 103, pp. 397-417.
- Hare-Mustin & Broderick, 1979, *The myth of motherhood*, *Psychology of Women Quarterly* 4.
- Illich, Ivan, 1981, *Shadow Work*, Marison Boyars. (玉野井芳郎, 栗原 彬(訳), 1982, 『シャドウ・ワーク』, 岩波現代文庫.
- 経済企画庁, 1992, 『国民生活白書』
- 厚生省, 1990, 『厚生白書』
- 厚生省, 1988, 『厚生白書』
- Genevie, L., & Margolies, E., 1987, *Motherhood Report* Macmillian Publishing Company.
- 大日向雅美, 1988, 『母性の研究』, 川島書店, p. 167.
- 岡村清子, 1990, 主婦の就労と性別役割分業『家族社会学研究』第 2 号, 24-35.
- 岡村清子, 1989, 家事の性格と家事意識, 直井道子編, 『家事の社会学』, サイエンス社, p. 81-112.
- 沢山美果子, 1979, 近代日本における「母性」の強調とその意味, 日本文化研究会(編)『女性と文化』, 白馬出版.
- 庄司洋子, 1986, 一番ヶ瀬康子・古川孝順『講座社会福祉 7 現代家族と社会福祉』, 有斐閣, p. 176.

堤マサエ, 1990, 船橋恵子・堤マサエ著, 『母性の社会学』, サイエンス社.
上野千鶴子, 1991, 『90年代のアダムとイヴ』, NHK 出版, p. 188.

上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制』, 岩波書店.
山村賢明, 1971, 『日本人と母』, 東洋館.
善積京子, 1991, 井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック』, 有斐閣.